

南海寄席内聞伝

神戸・横浜のアルメニア人アプカー氏

追手門学院大学教授 重松伸司

横浜外国人墓地No.14 横浜の観光名所「港の見える丘」上の「横浜外国人墓地」には今も4000余基が祀られている。墓地事務所に備えつけの「埋葬者墓碑リスト」には、1基ごとに氏名・国籍・略歴などが簡潔に記されている。ここに東アジアに渡ってきた一人のアルメニア人が眠る。以下は同氏に関する墓碑抄録である。

「墓域No.14、氏名A.M.Apcar、国籍ロシア、男性、没年1906、備考：アプカ商会主、神戸グレート・イースタン・ホテル経営」。「50数年前にイスファハンに生まれ、著名なアプカー海運会社の一族に連なる。Kobe Herald紙によれば、同氏は25年前に香港でビジネスに成功し10数年間滞在。その後、横浜にA.M.Apcar商会を興し、神戸のほか東洋・西洋の諸港に支店を設け広範に輸出入を営む。5年前には神戸のSakaye-machiにGreat Eastern Hotelを創業、また1、2年前にはShioyaにBeach House Hotel購入。本業は海運会社の経営であり、ホテルは支配人に任せていた…香港在留中にフリーメーソンの一員となり、神戸ではホテル協会のメンバーであった。夫人と3人の子どもが残されている…」

『外国人名士録』のアプカー氏 幕末～明治期の在日外国人名士・機関名鑑『ジャパン・ディレクトリ』は、居留地、横浜に定住した西欧人名と職業を知る貴重な資料であり、A.M.Apcar氏に関する記録もここに残る。
①「“Apcar”Line of Calcutta Steamers」(『ジャパン・ディレクトリ』xii号1890(明治23)年)／②「Apcar&Co.A.M., 163, Sannomiya-cho, sanhome and Great Eastern Hotel」(『ジャパン・ディレクトリ』xxxv号1906(明治39)年)／③「Apcar&Co.A.M.,Great Eastern Hotel,

36, Sakaye-machi, Itcho-me (DivisionStreet)」(同xxxv号)。『シンガポール・マレーシアのアルメニア人の歴史』(Nadia H.Wright, 2003)によれば、19～20世紀にかけてアプカー家はカルカッタを拠点にシンガポール、ペナン、中国、インドを結ぶ大海運業者として活躍していたという(47頁)。同氏は、横浜の支店をゆだねられていたのだろう。

神戸グレート・イースタン・ホテル 1890年代～1910年代ものと推定される1枚の彩色絵葉書がある(写真)。「Division Street 36, The Great Eastern Hotel, Kobe 神戸西町通」と印刷されている。その住所と『ジャパン・ディレクトリ』xxxv号の記録とを照合すると、「神戸・栄町1丁目、(居留地)第36区」の「グレート・イースタン・ホテル」はA.M.アプカー氏経営のホテルであったことが判明する。

同時期のKobe Directory所収の英文地図によれば「NISHI MACHI」の西側と「SAKAYE MACHI」の南側の交差点に「36, Great Eastern Hotel」と記されている。神戸旧居留地連絡協議会に照会すると、「旧居留地に隣接(西側)する栄町1丁目、現在の神戸住友ビル南側の駐車場」がホテルの所在地であった。現在の地図と明治39年代の地図の位置とはびつたりと符号した。アルメニア人貿易商A.M.アプカー氏は明治23年にはすでに横浜に居住しており、明治39年には神戸のグレート・イースタン・ホテルを経営していたのである。

ダイアナ=アプカー夫人の活躍 A.M.アプカー氏の遺族はその後どのような人生を送ったのだろうか。日本アルメニア協会の中島偉晴氏によれば、アプカー氏の死後、未亡人のダイアナさんは神戸から横浜の山手町220番地に移り住んだという。1915～21年当時、トルコ政府によるジェノサイドを逃れてロシアに避難したアルメニア難民たちは、トランス・シベリア鉄道でハルピンを経由して日本にやってきた。1918～20年の間、当時のアルメニア共和国の領事業務を委託された夫人の役割は、彼等の庇護と査証の発給であったという。難民の多くはその後アメリカに移住した。

1859年にビルマのラングーン(ヤンゴン)に生まれたダイアナさんは1889年に結婚を機に来日し、そして1937年に横浜でなくなり、夫と同じ横浜外国人墓地の一角に眠る。その生涯と活躍についてはなお不明な部分が多い。私はさらに調査を続けたいと考えている。